

氏 名 田中 大士

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第237号

学位授与の日付 平成27年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 万葉集伝本の研究

論文審査委員 主 査 教授 寺島 恒世  
准教授 海野 圭介  
准教授 小山 順子  
名誉教授 身崎 壽 北海道大学  
教授 小川 靖彦 青山学院大学

## 論文内容の要旨

万葉集の伝本の研究は、大正十三年刊行の『校本万葉集』によって基礎が築かれた。これは、我が国の古典文学のなかでも最も早く、かつ内容の上でも高い水準を有していた。ところが、その内容の高水準のためか、かえって以降の万葉集の伝本の研究は振るわず、現在の万葉集の諸伝本の枠組みは『校本万葉集』の首巻の解説をそのまま踏襲しているといつてよい。本研究は、この万葉集諸伝本の枠組みを再検討し、現在知られている万葉集の諸伝本の間を見直した上で、万葉集伝来の様相をあらたに記述しようという試みである。

『校本万葉集』首巻によれば、現存万葉集の伝本は、鎌倉時代の学僧仙覚が校訂した本（仙覚校訂本）の系統とそれ以外の本（非仙覚本系統）とに分けることが出来る。後者の非仙覚本系統の本は、訓が平仮名のもので片仮名のもので二種類あることは、すでに『校本万葉集』で指摘されているが、それが系統上二つに分けられるか否かについては言及されていない。また、同書では、非仙覚本系統の諸本が仙覚校訂本といかなる関係にあるのかについても一部の本を除き言及されていない。

まず、非仙覚本系統の平仮名訓の本と片仮名訓の本との関係であるが、万葉集伝本の本文（万葉仮名の部分）は伝本によって異同が少なく、系統分けの手段としては使いにくい。一方、万葉集伝本の訓は、逆に諸本間で錯綜していて、こちらも系統分けの有効な手段としては有効でない。だが、長歌の訓に限っていえば、ある大きな特徴が見られる。それは、平仮名訓の本には長歌に訓がほとんど見られないのに対して、片仮名訓の本には半分程度の長歌に訓が見られることである。しかも、片仮名訓の本の訓のある長歌の分布は、諸本で同じ傾向を示している。片仮名訓の本の長歌訓の分布は巻一～十には訓があり、それ以降では巻十五と十九にしかないという変則的なものである。その分布が諸本で一致するという事は、諸本がばらばらに付訓されたのではなく、そのような長歌訓の分布を持つ伝本があり、現存の片仮名訓の本は、すべてその本から書写、転写された本であると考えられる。一方、基本的に長歌に訓がない平仮名訓の本は、それら片仮名訓の本とは系統を異にすると考えられることになる。つまり、現存の非仙覚本系統の伝本は、平仮名訓の本と片仮名訓の本とで明確に系統分けが出来ることになる。しかも、片仮名訓の本の訓は、長歌、短歌ともに、平仮名訓の本の訓のある歌をすべて含んでおり、片仮名訓の本は、明らかに平仮名訓の本を受けて、後の時代に作られた本であることがわかる。

非仙覚本系統と仙覚校訂本との関係は従来明確にされてこなかった。ところが、非仙覚本系統の片仮名訓の本の長歌訓の分布は、仙覚校訂本と密接な関係にあった。仙覚校訂本は、歌々の訓をその由来によって、「古点」「次点」「新点」と明確に区別している。「古点」「次点」は、従来の伝本に訓が存した歌、「新点」は従来の伝本に訓がない歌ということになる。ところが、長歌についてこの古次点と新点の分布をたどってゆくと、片仮名訓本系統の訓がある歌の分布と仙覚校訂本の古次点の分布とが一致するのである。これまで、仙覚校訂本は様々な伝本の付訓状況から古次新点の別を見極めてきたと考えられてきたが、少なくとも長歌に関しては、片仮名訓本系統一種類によっていたことが判明した。一方、短歌についても、長歌と同じく片仮名訓本系統の訓のない歌の分布と新点の分布は合致していることがわかった。すなわち、仙覚の校訂本は、長歌も短歌もすべて、片仮名訓本系統一種類に基づき、従来訓があるかないかを判断していたのである。しかも、片仮名訓本系統の傍訓形式の本は、題詞が歌よりも低く、仙覚の第一次校訂本（寛元本と称する）は、

(別紙様式 2)

片仮名訓本系統（傍訓形式）の伝本を底本として用い、その訓の欠落した歌々に新たに訓を補充するという形で作られたと考えられる。従来の学説では、仙覚校訂本の底本は平仮名訓本であると考えられてきたが、片仮名訓本系統と仙覚校訂本との相関関係は明らかである。

つまり、万葉集の伝本は、仙覚の校訂本以前に、これまでの本の訓（主として長歌）を**集成した片仮名訓本系統が存在し、仙覚はそれを底本として、校訂本を作り上げたということである。**仙覚の万葉集校訂は、画期的な事業であることには違いないが、それ以前に同様な試みが存し、仙覚はそれを先蹤として、より洗練した校訂本を作り上げていったと考えられる。仙覚の校訂は、その優秀性から、古今独歩の業績とみられがちであったが、その前段階ともいえる伝本が存し、そこから学んで優れた校訂本を作り上げたという点を明らかにすることによって、より公正な評価が下せると考える。

博士論文の審査結果の要旨

『万葉集』の伝本研究は、諸本が博搜され、異文が網羅された『校本萬葉集』(1925年)の公刊の後、大きな進展は見られず、現在広く一般に読まれている仙覚校訂本の系統(仙覚本)と、それ以外の系統(非仙覚本)とに分類する把握は継承されながら、両系統の関わり等、その内実は解明されないままに今日に至った。

本論文は、その課題に対し、『校本萬葉集』以後に発見された広瀬本を軸に諸伝本の詳細な検討を重ね、これまで非仙覚本に類別されながら、その関係は不分明であった平仮名訓諸本と片仮名訓諸本が、系統として明確に分かれること、及び、その片仮名訓本が仙覚本の成立に深く関与していた事実を明らかにしたものである。

その論証過程において特筆される成果は、まず、長歌の訓の分布から、片仮名訓の諸本が同一の祖本から派生したことを導き、巻一から巻十における長歌の両訓の違いから、祖本が多様な訓による「校訂本」であったことを推定したことである。伝本研究で初めて系統分けが可能なことを導いた事実とともに、個別的に考察されてきた諸本を総体的に捉える視点をもたらす究明として、これは高く評価される。

また、同一祖本から派生した片仮名訓諸本が、独自に平仮名訓本の本文や訓を受容していること、とりわけ、従来広瀬本との関わりが深いとされてきた春日本が、巻十一以降においては元暦校本と近似する実態を突き止めたことは、平安時代末期から鎌倉時代にかけての流動的な書写状況を解明したものとして有益である。

さらに、片仮名訓本の長歌訓と仙覚本の古点・次点長歌の分布状況の一致をもとに、仙覚訓を書き入れた鎌倉時代の片仮名訓本を状況証拠として、仙覚が校訂時に基づいた本文を片仮名訓本と推定したことは、これまで仙覚奥書によってそれを平仮名訓本としてきた定説を覆す画期的な成果である。併せて、仙覚校訂の基本資料となり、その役割の重さが知られてきた親行本につき、その性格の一端を明らかにした意義も大きい。

矛盾をきたす前提や事象に対しても、倦まず反証を提示することに典型的なように、論証態度は一貫して着実であり、各論いずれも古筆切として伝わる断片を含む現存諸伝本の精査と相互比較を基盤として構築されており、十分な説得力を有している。

従前の研究に対する総括と批判については、伝本を問い直す論考として、現存諸本の分類概念たる仙覚本・非仙覚本を用いることになお課題を残すものの、付訓の状況を切り口に伝本系統に見通しをつけた成果はきわめて大きく、進展が大いに望まれる。

本論によって初めて提示された片仮名訓諸本の祖本を「校訂本」と見る推定は、記録に残っていない12世紀末頃の大規模な『万葉集』校訂事業を掘り起こしたことに他ならず、記録に残る二条天皇・藤原清輔による片仮名訓形式の採用との関わりを追究することが望まれてくる。さらに、写本の書記媒体としての平仮名・片仮名の相違や、平安・鎌倉時代における書写態度という原理的問題にも及んでゆくことを期待したい。

伝本個々の性格と個別の生成の追究を通し、『万葉集』伝来における変容を解明した本論文は、仙覚本へと収斂する『万葉集』研究史の変遷をも視野に収めており、『校本萬葉集』の成果ゆえ固定化したテキストとして扱われがちな『万葉集』を、歴史の流れの中に立体的に描き出すことにも成功している。多くの新見に満ち、今後の『万葉集』の伝本研究の基本的視角を堅実な方法と論理によって提示した業績であり、審査委員会は、博士学位論文に十分ふさわしいと判定した。